

■ 足下はドル高の流れが一段と強まる状況

昨日（7/31）の米連邦公開市場委員会（FOMC）において米連邦準備理事会（FRB）は0.25%の利下げを決定した。それにも拘らず、市場でドル高・株安の傾向が強まっているのは、既知のとおり、今回の利下げ幅や今後の政策方針に関わるFRB議長の発言内容が「やや行き過ぎた事前の市場における米利下げ観測」のレベルに届かなかったからである。

つまり、想定していた通り「行き過ぎた利下げ観測」の“反動”が出た。パウエルFRB議長は今回の利下げについて「下方リスクに対する保険」と述べた。言わば「予防的」な利下げなのであるから、その幅は0.25%で十分である。むしろ、想定される下方リスクが現実のものになった場合に備え、イザという時に討てる手はできるだけ残しておいた方がいい。その意味で、市場で事前に0.5%の利下げの可能性が取り沙汰されたことが不思議でならない。

さらに、議長は「今回の利下げは中期的な金融政策の調整であり、長期的な利下げ局面の始まりではない」、「（だからといって）1度きりの利下げだとは言っていない」などとも述べた。以前から「予防的」な利下げはあり得るとして、それを実行しただけなのであるから「長期的な利下げ局面（サイクル）の始まり」であるわけがない。だからと言って、議長の口から「利下げは1度きり」などという言葉が飛び出すはずもない。

FRBが保有するリスク資産の縮小終了も含めて、今回の決定はほぼ事前の想定通りであったが、事前には様々なオプションに対する警戒もあり、念のために張られたポジションは次々に巻き戻された。結果、ついにドル/円は109円の壁を突破。執筆時まで一時109.32円処まで上値を伸ばす場面もあり、目の前の景色はだいぶ変わってきている。

一つに、7月10日高値の108.99円を上抜けてきたことがチャート・フェイス的にも大きい。また、それ以前に一目均衡表の日足の運行線が日々線を上抜ける動きとなっていた点も再確認しておきたい。こうした強気のシグナルが増えていることだけは確かだ。

7月下旬以降、ドル/円は21日移動平均線（21日線）をクリアに上抜ける動きとなり、その21日線は足下で上向きに転じてきている。さらに、一目均衡表の日足「雲」の中に潜り込む恰好となったことで、当面は日足「雲」上限（現在は109.59円）が一つの上値の目安として意識される。その近くには89日移動平均線も位置しており、とりあえずドル/円は109円台半ばから後半の水準を試しやすい。

一方、足下で生じているドル高の流れはユーロ/ドルを1.1100ドル割れの水準にまで下落させてもいる。前回更新分において筆者は「中長期的な下落トレンドにある」、「戦略的には戻り売りが基本」と述べ、その時点では1.1200ドル処が重要な節目だった。

また、前回更新分では「（ECB理事会後に）一旦リバウンドが生じる可能性も」と述べ、これも想定通りだった。先週25日、ECB理事会後の会見でドラギ総裁が市場のユーロ売りに一旦歯止めをかけるような発言をしたことで、一旦1.1100ドル近辺まで下落していたユーロ/ドルは1.1188ドルまで値を戻したのだ。もちろん、ここでも「戻りは売り」である。



かくなるうえは、もはや1,1000ドル割れも覚悟ということになるわけだが、目先は左図に見るように幾つかの下降チャネルの下辺水準にあることから、一旦は下げ渋る動きとなる可能性がある。

なお、仮に1,10ドルを割り込めば、次の下値の目安は1.08ドル処ということになりそうである。

（8月1日 11:35）